

日付:2016年9月4日／聖書:列王記下2:1～14

説教:「主は歴史のただ中に居られる」

ボンヘッファーの論文に「教会は死んでいる？」がある。時代は 1932 年のドイツ。この年ヒトラーのナチス党が、ドイツで第一党に選ばれ、翌年ヒトラーが首相になる。著者は、その時代の中で教会のあり方を問う。この世界は、《かつてないほどの規模で武装してにらみ合っている世界、軍備によって平和を確保するために軍備に狂奔(きょうほん)している世界、「安全」という言葉がその偶像となっている世界がある。》この時代、「安全」というものを維持するために、狂ったように軍備を強化し、他国と競争し、それはもう「安全」という偶像化だという。《教会が戦争を聖化するようなことがあれば、教会は主への服従を拒むことになる。キリストの教会は、戦争に反対し、人間と人間との間の、国民と階級と民族の間の平和に味方するものとして立つのである。》この時代ドイツの教会の多くは、ヒトラーを支持した。教会もまた、経済が良くなること、国が豊かになること、軍備による「安全」が維持されること、・・・そのことに目が向けられていた。

ボンヘッファーは、教会とはこの世界から逃避するのではなく、この世の現実に向き合うことであるという。何故ならば、イエス・キリストはこの世において、十字架にはりつけにされ、この現実の世界において復活という希望をもたらしたから。歴史の只中に居られる主、今この時、この時代の中に居られる主を覚えること、証して行くこと、それが教会である。

弟子のエリシャは、師のエリヤが天に上げられた後も不安をもらす。14 節《落ちて来たエリヤの外套を取って、それで水を打ち、「エリヤの神、主はどこにおられますか」と言った。》神の御業を見ているはずなのに、不安がぬぐえないエリシャがいる。ところが《エリシャが水を打つと、水は左右に分かれ、彼は渡ることができた。》この後から、エリシャは預言者エリヤの後継者として不安をもらすことなく堂々と主の預言者として歩んで行く。何故か？ この「水は左右に分かれた」とあるのは、あのモーセがイスラエルの民をエジプトから救い出した時に起きた主の御業。歴史の只中に居られる主の御業が表されている。最初の 2 節から始まる3つの繰り返しがあがるが、そこに出てくる地名、ベテル、エリコ、ヨルダン。この地名も主の御業が表された場所。エリシャは、今この時も共におられる主に気づかされたのである。

教会は、歴史の只中に居られる主に気づいているだろうか？「教会は死んでいる」と言われないうちに、このところから問われて行きたい。(神谷)